

フィリピン台風ハイエンに関するワークショップをタクロバン市で開催しました(2015/10/12)

テーマ：2013年フィリピン台風ハイエン
 場所：フィリピン・タクロバン市、レイテパークリゾートホテル

フィリピン各地に甚大な被害をもたらした台風ハイエンの発災から約2年が経過しました。災害科学国際研究所では、2013年12月から現在まで学際的な調査を精力的に実施してきましたが、調査より得られた成果を被災地に還元するため10月12日(月)にワークショップ『Reflecting on Typhoon Yolanda -for saving future lives-』を、タクロバン市と共催しました。本ワークショップではタクロバン市、フィリピン公共事業省、教育省、天文気象庁、フィリピン大学、JICA等から約65名の参加者を迎え、講演、村長からの報告や質疑応答を通じ活発な討議が行われました。当研究所からは、災害リスク研究部門の呉修一助教、人間・社会対応研究部門の井内加奈子准教授とマリ エリザベス助教、情報管理・社会連携部門の小野裕一教授、泉貴子特任准教授と伊藤拓也研究員、リーディング大学院の地引泰人助教が参加しました。本ワークショップを通じ、当研究所の調査より得られた知見や東日本大震災の経験等がフィリピンの被災地に伝えられました。今後も災害科学国際研究所では、フィリピンのBuild Back Betterを達成するため復興支援や防災教育への取り組みを継続していきます。本ワークショップでの発表者とタイトルは以下に示すとおりです(下線・太字が研究所所属教職員)。

- V. B. Malano (PAGASA) :The role of PAGASA after typhoon Yolanda
- A.J. Polistico (Tacloban City) :Development plan of the City
- M. Lagman (Tacloban City) :Housing progress and issues
- S. Kure :Preparation for future super typhoons
- Y. Jibiki :Future Challenges for Disaster Risk Reduction
- T. Izumi :Suggestions from APRU members and other stakeholders towards recovery process
- T. Ito :Tide embankment project based on decision of local communities
- K. Iuchi :Revitalizing local economy with planning
- E. Maly :Post disaster housing relocation: International comparison
- Y. Ono :Closing Remarks



上段：左から Malano 天文気象庁長官，Polistico 氏，Lagman 氏
 下段：左から 呉助教，地引助教

文責：呉 修一（災害リスク研究部門）
 伊藤拓也（情報管理・社会連携部門）
 井内加奈子（人間・社会対応研究部門）

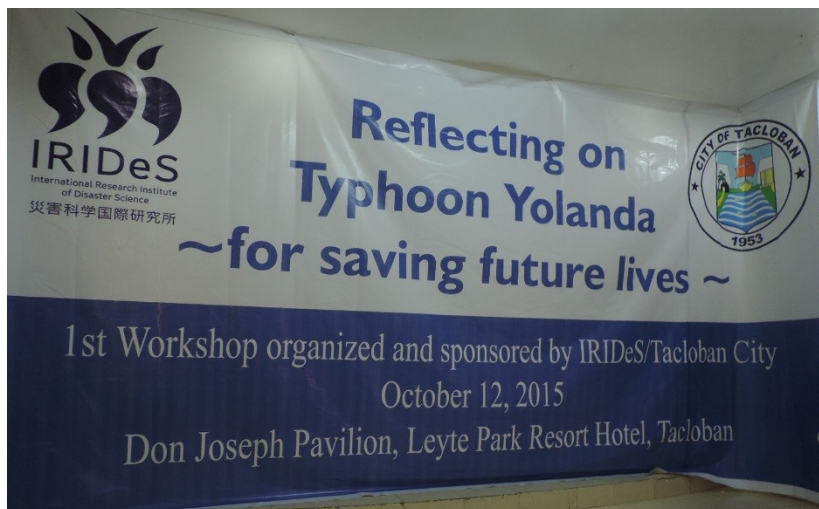
(次頁へつづく)



上段：左から 泉准教授，伊藤研究員，井内准教授
 下段：左から マリ助教，小野教授



集合写真



ワークショップの横断幕